

教文通信写真館

I will be here for you



写真とエッセイ：倉石典広さん（生物教育研究会 伊那北高校）

皆さん、カエルは好きですか？

私はやっぱり好きですね。最近、理数探究の研究で生徒と・・・ エッセイの続きは 8P

教文通信

発行所  
長野県教育文化会議  
発行人  
田澤 秀子

今号の記事

- 01-03  
第3回総合研究会報告
- 03-04  
数学教育全県研究会報告
- 04-07  
教育のつどい報告
- 07  
第5分科会 理科教育  
「免疫」をどう教えるか？  
YouTube紹介
- 08  
書籍紹介  
全県研究会紹介  
教文通信写真館エッセイ



開会・趣旨

社会科教育、情報教育による共同開催となった。

スマホタブレット、大量の情報、あふれる情報がある。個人情報を利用されている、操られている 危うい状況にある。選挙をめぐるデマ、誤った情報が飛び交う、すり替え、ニセ情報があふれている。学校のタブレット利用、ICT活用をどうするかも大きな課題となっている。

講演

ソーシャルメディアと政治  
操られる世論と選挙

高橋純子（朝日新聞論説委員）  
私はSNSは やっていない。  
誰ともつながらない  
ことで、批判され  
ても褒められても自分の軸が揺ら  
がない。



小選挙区制の特徴

仮定の選挙区で考えたい。たとえば、9小選挙区、有権者9人（全有権者81人）、投票率6割を切った場合、81人中15人を抑えればよい。

安倍政権

本来の民主主義を脇に置き、選挙に勝つことを主に、岩盤支持層を死守

第3回総合研究会  
ソーシャルメディアと  
教育を考える

7月19日（土）

松本市勤労者福祉センター

小選挙区制は政権交代できる2大政党をつくる目論見。ところが、現状は多党化、目論見からはずれてきている。

選挙制度への疑問  
どうあるべきか議論すべき。

政治とメディアとの関係の変化

メディアは政治監視の働きを持っていたが安倍首相はメディアを握った。

森首相時代は、1日に2〜3回、記者が首相に直接話を聞くチャンスがあった。

小泉首相は、自ら1日2回テレビカメラの前に出た。ぶら下がり会見にも応じた。

安倍首相。メディア対応はあまりうまくなかった。

民主党の時。1日2回のテレビカメラの前での会見がなくなった。要望があれば聞く形に。

再び、安倍首相。極端に記者会見は開かず、事前質問に対して会見開く程度。もともと首相に対する単独インタビューには応じないルールで、インタビューはグループインタビューに。

安倍首相時、単独インタビューが復活したが、メディアが首相に主導権を握られる。

そしてSNS時代へ。  
会見という説明責任を果たさず、SNSで一方的に発信で済ませる。



SNSとマスメディアとの対立

◇メディア対政治

81人中の15人をつかむにはSNSは有効。

◇SNSの隆盛

何が起こっているのか。「ポピュリズムの仕掛人」(ジュリアーノ・ダ・エンポリ)の引用

・小さな集団の情念を煽る  
・集団を中道ではなくエクストリームに収斂する

・「大衆」対「エリート」という単純な図式に基づく政治的な対立を再定義する

・右派と左派の分裂を加速させ、行かれる有権者の票を取り込む

・新たなプロパガンダが糧にするのは大衆の否定的な感情

・お祭り気分という解放感を醸し出す

・誰もが観客から俳優になる  
・誰もが自己愛に陥る時代



量子政治学

客観的な事実は存在しない。すべては他の事象との関係で暫定的に定義される。

現実には観察者によつて異なる

アクセスするコンテンツはアルゴリズムによつて個別化される。

よつて合意形成はますます困難になる。

他者の立場になつて考えることができない

← アルゴリズムに支配された世界に対峙するには

リアルに対面でその人の本気度、体温を伝える機会が必要。

映画・音楽・文学・芸術は、誰かが答えを持っているという世界を打ち壊すもの。

生徒との関係の中で学校の先生が答えを持っているような関係になつてほしくない。

← 答えのない世界。合意・対話によつて答えを見つける世界。



「自分の感受性くらい」茨木のり子の詩

■ 現場からの報告

「情報があふれる時代の

社会科教育の在り方」

「現代社会」情報についての導入の授業

上田染谷丘高校 上條隆志さん

← メディア⇨情報を媒介するもの(テレビ・SNS・新聞・本・教科書・参考書・先生・友人)

世界はメディアを通じて得た情報で成り立っている。しかも重要性が高い。そして情報は膨大に増えている

←  
メディアの特徴を考える

メディアの輪郭線をはっきりさせる  
メディアの多義性を意識する  
教育のメディア性に自覚的でありたい



### 「教科『情報』授業実践例」

箕輪進修高校 有賀優樹さん

さまざまな実践例の紹介

### まとめ

合意型民主主義とは何か  
考えるきっかけとなった  
相手を理解することは民主主義の根本  
その感性を磨くのが芸術



### 閉会

社会がどんな方向に向かうのか  
今後も様々な視点から研究していく必要がある

(常任委員 牧内淳一)

## 第1回数学教育全県研究会

### 高等学校における

### 統計教育の問題点と課題

講演

#### 「高等学校における

#### 統計教育の問題点と課題」

鎌倉稔成氏(中央大学) 講演

2025年度 第1回全県研究会報告

今年度第1回全県研究会は中央大学の鎌倉稔成先生をお招きしました。文部省統計数理研究所や多くの大学等で統計学を理論面と応用面の両面にわたりご活躍されました。このような経験から実際の統計の扱い方、またそこの数学の役割について数時間話されました。講演というよりも研修です。ここ数年、学校現場において過剰とも言える統計教育の必要が叫ばれてきています。今回は実際に授業等に役立つ内容ではありませんが、専門家の立場からの意見などを参考に「統計教育」「確率・統計」などの内容を高い立場から検討したいと考えました。特に高校では統計内容を教科「数学」の中で教えるという現在の学習指導要領での枠決めが大きな問題点であることが現場で感じられているという意見もあります。これは「感じられている」だけのものでしょうか。この点も

明確にしたいと思いました。

まず、なぜ今統計教育なのかという点に関しては次の指摘がありました。

これはまさに世界的な潮流であり、他国に比べて遅れているというのである。各方面からの学校現場への強い統計教育の充実を求める状況があった、とは少し違うようです。また統計の面白さを教育にどうとり入れ込むかは大学においても難しいとの指摘もありました。

Evidence-based という学問があります。これは「根拠に基づいた」という意味で意思決定な際に科学的根拠や客観的な事実を重視する考え方や手法を扱います。これは医療・政治・教育・マーケティングなど多岐にわたるものです。統計を扱うには必要であるがこれらは数学教育との乖離があり整合性が難しいようです。

統計学と言えば、普通次のような表現をされます。集団の特性を把握する学問。対象としては…ランダムに変動する不確実性現象。高校では、くり返し観測できるという不確定な現象の捉え方を含めた統計概念の理解とコンピュータ利用になるかと思えます。しかし本当は「総合科学」です。活用される分野は、品質管理、信頼性工学、安心、

安全性、医学、薬学、マーケティングサイエンス、画像解析、地震、災害、気象科学などがあります。かなりの専門知識が必要であり、統計の面白さは高校、大学の数学教育という枠には入らないのが現実であるようです。

また、講演が終わった後に聞いた話の中で次の点が気になりました。「箱ひげ図」です。これは現在16種類の箱ひげ図が考えられており、またこれを正確に分析するには数理統計学の知識が必要とのことです。中学・高校での統計教育に登場する箱ひげ図はいったいどういう教材なのでしょう。統計を実際に活用している立場からすると中途半端な統計の知識を持つよりも、数学の力、知識を持つ人にもっと統計に興味を向けてほしいというのが本音のようです。

最後に「確率・統計」。よく確率と統計が並べて使われていますが、確率に対する専門家の意見もいろいろあり、かなり難しい数学のようです。また確率を数学として扱っているのかという考えもあるようで、その上確率と統計との整合性がかなり難しいようです。詳しい具体的な内容の話はありませんでしたが、この「確率・統計」は大学で学ぶべき内容かと思いました。

教科「数学」の中で教えられている統計内容にはかなりの限界があるようです。平均、中央値、標準偏差などの話題は必要であり、高校ではデータの整理・分析」を重点にするのはいいでしょう。しかし、統計は「総合科学」であるということも多くの方が認識する必要があるようです。

浦和と飯能は遠かった!!

## 教育のつどい2025 in 埼玉

8月17日から19日にさいたま市浦和会館を会場に教育のつどい(全国教研)が開催されました。3日間の参加者はのべ3800人を超えました。

長野県から参加者15人(レポーター9人・内高校生3人、司会者2人)が参加しました。

17日には開会全体集会と教育フォーラム6分散会が、18日にはさいたま市内と飯能の自由の森学園を会場に18の教科別、課題別分科会が開催されました。

全体集会には1300人が参加し、討論のよびかけでは「不登校34万人、自殺、暴力行為など増え続け、学校が子どもの居場所になり切れず追い詰める場所になっている」と「生きにくさ」を指摘しました。この状況を変えるため平和や人権が重んじられる社会を作りあげたい。そのため教育のつどいで参加者の人間関係を作り、励ましの場とし温かい交流の場となるようよびかけがありました。



開会全体集会では、オープニング現地企画として「いのちと平和とこどもたち・合唱構成『ぞうれっしやがやってきた』を川口ぞうれっしや合唱団が披露しました。続いて、安田菜津紀さん(NPO法人Dialogue for People フォトジャーナリスト)が「難民の声、家族の歴史から考えた『共に生きる』とは何か」と題して記念講演を行いました。シリア、ガザ、福島と沖縄に暮らす人々と繋がりをご自身が撮影された写真を投影されながら話されました。また父親の写真を紹介



され、安田さん自身の生い立ちとアイデンティティーに言及されました。排外主義が公然と主張され、ヘイトスピーチやヘイトクライムが根強く残る今、「共に生きる」こと「不条理のそばを黙って通り過ぎず、子どもたちに語りかけつつづけることの大切さ」の大切さを訴えました。

17日夕刻の教育フォーラムは教育DX、学習指導要領、多様性の尊重、戦後・被爆80年のいま平和は、参加と共同の学校づくり、子ども・若者支援、学校統廃合などをキーワードとした分散会に分かれ約760人が討論に参加しました。

18日、19日の2日間にわたり開催された分科会では約260本のレポート報告がありました。日本全国の幼小中特高大、民間教育施設からの報告があり大きな学びの場が生まれ、交流が行われました。生徒の成長と発達を信じ、一人ひとりに寄り添うていねいな教育実践の報告があり貴重な学びの場となりました。

長野県からは牧内淳一さん（長野東・国語）、盛田彩花さん（丸子修学館・外国語）、小原秀樹さん（長野西中条校・理科）、武井由佳さん（辰野・参加と共同の学校づくり）、森嶋光さん（巨摩代・子ども、青年たちの生きたい社会づくり、環境教育）、工藤ジュンさん（長野西・子ども、青年たちの生きたい社会づくり、ジェンダー平等の教育）がレポートを出し討論が行われました。

以下、参加者の感想で、つどいの全体像を報告します。

### 全体会 （17日13時～15時半） 記念講演 安田菜津紀さん

★戦争がおこると、廃墟になってしまった街や傷ついた人々が映像として届けられることがほとんどだが、今回の講演では戦争がおこる前の「日常」の写真が多く、その日常が壊されてしまったのだと思うと、より強く心に刺さるものがあった。今自分の目の前にある日常の尊さを再認識するとともに、それが奪われてしまった人びとがいるということを忘れずにいたいと改めて感じた。（盛田）

★安田さん、聴く機会は2度目（前回佐久地区教研）、今回も伝わりやすい貴重な機会でした。今後も様々な発信を願います。（寺尾）

★「難民の声 家族の歴史 から考えた 『ともに生きるとは何か』』というタイトルの講演。ガザ、福島、クルド人難民、在日朝鮮人について。ガザの子どもたちと東日本大震災で行方不明になった娘の遺骨収集の話では、彼女自身が撮った写真があるのでリアリティーがひしひしと伝わる。寛容さを失った社会で身近な差別を放置すると、それはやがて巨大な暴力になるという



コメントが印象に残る。不条理にでくわしたら声を上げる。不条理のそばを黙って通り過ぎない姿勢を教わる。（井手）

★戦争の被害を受けている国の現状を知り、もつとたくさんの人に知ってもらい戦争をしてはいけないということを理解してもらいたいと思いました。（竹村）

### 教育フォーラム （17日17時～19時半）

★B分散会…声をあげ、子どもの成長・発達につながるものへ教育DXと学習指導要領改訂を考える国内各地で起きている状況も把握でき良い機会となりました。他のフォーラムにも出たかったです。（寺尾）

★F分散会…競争原理を超える学校づくりをめざして～現在の教育における3K、競争主義、管理主義、空気を読む（読め）の中で多くの生徒は





(18日10時〜17時半・19日9時半〜16時)  
**分科会**

生きている。打破するには学校では、信頼に足る他者(仲間、教師など)がいること、安心して過ごせる場があること、居場所と出番があることが求められる。それにより「基本的信頼」を育み、他者とともに社会・世界をつくる市民を育てる場が学校であるという主張。日々の受験指導に追われる自分の発想にはない言葉の数々に圧倒される。(井手) ★D分散会・戦後80年被爆80年の今戦争・被爆体験を伝え平和をどうつくるのか、実際に原子爆弾の威力や恐ろしさを経験して人からのお話だったので思いがより強く伝わるし若い世代の方にも知って欲しいと思いました。(竹



★外国語分科会〜レポーターそれぞれが様々なスタイル・心構えで授業をしているということがわかり、正解はないんだなあと改めて感じた。全てを真似することはできないが、各レポーターの要素を抜き出し、自分の授業にもとりいれられることを見出していきたいと思った。(盛田) ★B分科会(全体会 B分散会)〜キーワードは参加と共同、同僚性、授業や行事づくり、地域との関わり、対話・応答、実態から始め児童生徒の発達段階に即し取り組みを行う、ICTや生成AIを巡ってーやはりリアルな現場と検証、そこでの対話・応答がなければ望ましい教育にはならない(ICT、生成AIに関しては様々な問題・課題が有、その

扱い方には様々な議論、検証など必要一生徒の成長、教職員の専門性の広がり&深化に寄与するか等)。教科書作成に関して出版作成者側から問題課題に関しての報告、およそ20年前までの小学校教師の実践報告、3観点評価・評定にまつわる全国各地からの実態報告等一各県の様子など交流し今後の取り組みまで議論できるとよかったですと思います。分科会再編の年目とのこと、自身の参加立場と時間制約により、このあたりは致し方なかったかの思いです。(寺尾) ★A参加と共同学校づくり〜自分達のしている活動が他の学校の先生やたくさんの人に知ってもらえとても嬉しいし、他の方の活動を聞いて自分の知識や考え方が広がるいい機会になったのでとてもいい会でした。(竹村) ★第1分科会 国語教育〜2年連続でレポーターとして参加させていたいただきました。拙い授業実践のレポートでしたが、討議し

ていただき、多くのご意見をいただくことができました。全国の実践レポートを聞き、授業は自由でなければならぬと再認識しました。(牧内)



### 全体を通して

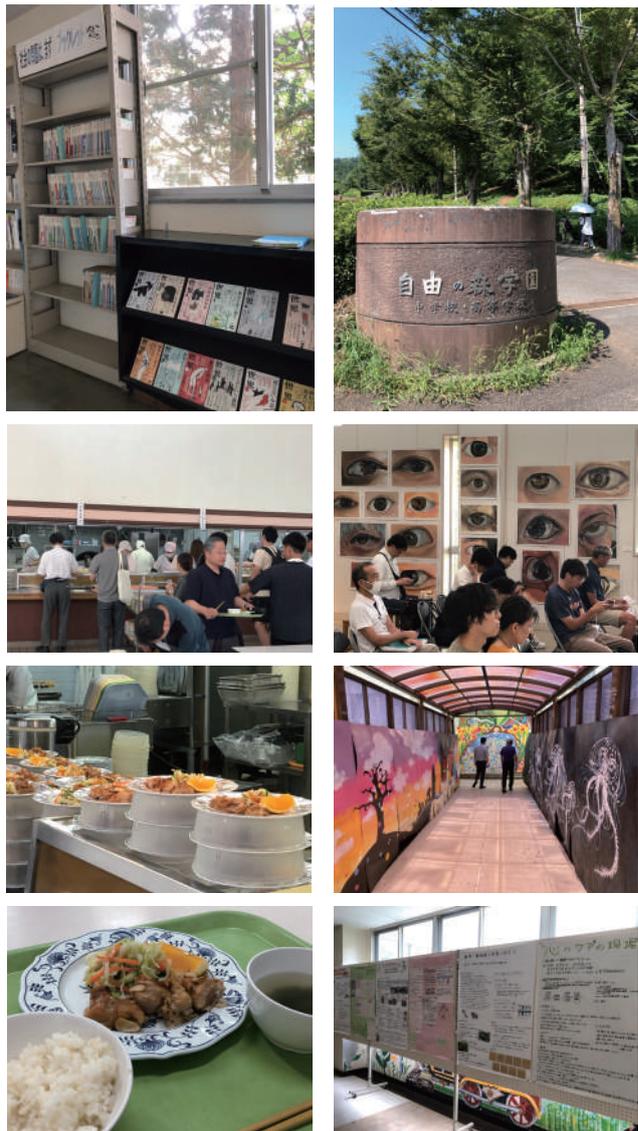
★対面で様々な取り組みなど聴くことが出来ま  
す。多くの方が参加するとよいと思います。(寺尾)  
★受験指導に限らず、広い意味での教育の実践に  
出会えるこの会を毎年楽しみにしている。とくに  
今回は会場が自由の森学園ということで、既成概  
念にとられない教育の実践現場で過ごす時間は  
大いに刺激となった。(井手) ★全体的にやっぱ  
り若い世代の人が少ないなと感じました。教育の  
つどいは自分の考え方の範囲がとても広くなる  
し知識も増えるいい会だと私は思いました。だ

### 分科会会場・・・自由の森学園

さまざまな掲示、地元食材を使った食堂



からもっとたくさんの人にも伝えたいし情報を  
共有したいと思ったので若い世代の人に来ても  
もらえるような工夫をするといんじゃないかなと  
思いました。(竹村)



### Song of IV 歌詞は前号参照

作詞・作曲・編曲 Hideki Ohara

前号で告知しました小原秀樹さんの YouTube 動画  
小原さんの許可をいただいて URL を公開します  
<https://youtu.be/LclDMwGchGQ>  
以下の注意事項をくれぐれもお守りください。

- ◎動画・曲・歌詞とも授業でお使いいた  
だいてかまいません。
- ◎動画の説明欄にリンクを貼ってある「裏  
設定について」も授業でお使いいた  
だいてかまいません。
- ◎著作権は小原さんとイラスト作者にあ  
ります。
- ◎小原さんの名前は伏せて投稿されてい  
ますので、小原さんの作品と特定するよ  
うな使い方やご発言はご遠慮ください。



北信濃の戦争の記憶

本  
の  
紹  
介

私たちの信州長野の各地にも今も残る戦争遺跡、遺構。平和祈念の碑や像や塔もひっそりとおかれている。それらを訪ね、撮影・取材・記録したエッセイ集です。

発行所は教文会議とも関係の深い「信州と教育の自治研究所」、そして写真とエッセイは、教文会議と高教組の大先輩の北原高子さん。注文は、ブンゲイ印刷まで。

〒380-0948 長野市差出南2丁目14番23号

TEL 026-268-0333 bungeiinsatsu@gmail.com



まなびの秋です 全県研究会紹介 どなたでも参加可

長野県教育文化会議 全県研究会

# 宙わたる教室のリアル

定時制・小規模校の教育実践の意を問う

10月11日(土) 12:45~16:00  
松本勤労者福祉センター(オンライン併用)

◆講演「宙わたる教室のリアル 12:45~ 定時制・小規模校の教育実践を考える」  
●小規模校・定時制の取り組みは生徒を社会へつなぐ 武田るい子さん(清泉大学)  
●大人の都合による学校統廃合のリアル 小規模定時制の特長を多部制単位制統合で保持する 蓮生恵之さん(市立札幌大通高等学校 元教諭)  
●国内外の小規模校の取り組み その課題と意義を問う 岡部敦さん(清泉大学)

◆報告①「外国由来生徒支援のリアル」  
八重真佐子さん(実践進修高校)

◆報告②「生徒・卒業生が語る 定時制・小規模校のリアル」  
●卒業生は今、当時を振り返り何を思うのか  
●在校生は、何を胸に教室に座るのか

「宙わたる教室」。定時制や中山間地などに位置する小規模校では、奥に多様な生徒が学んでいます。生きづらさを抱えた生徒や外国由来の生徒も少なくありません。それらの生徒への丁寧な学習指導や地域連携などを通じて、生きる意欲を高める取り組みが実践で行われています。「新しい高校教育観」を先取りする教育実践と考えるかもしれません。そして、その取組めは、継続や存続にいかかるか。すべての学校は直面する課題です。いくつかの定時制小規模校では統合や廃校の方向で検討が進みます。小規模であるがゆえに、あるいは定時制専門校であるがゆえに受け入れ、大切にされてきた教育実践を、今後、統合校にどのように生かしていくのか、道徳の教員の違いや思いがどうつながっていくのか、高校再開における教育観のつくりや運用に積極的に取り組んだ先行事例、研究員による現地報告、現場からのレポートや生徒・卒業生の声を聞き、参加者みんなで見学します。

長野県教育文化会議 教育格差と貧困問題・教育条件整備研究会  
多様な学び生徒理解と発達研究会  
TEL:026-234-2216 Mail:kyobun.nagano-h@educas.jp

参加費は無料 どなたでも参加できます 申し込みはメールまたはQRから

伊予原新さんの「宙わたる教室」。書籍もドラマも話題になり、記憶されている方も多いと思います。今回の全県研究会のテーマは「宙わたる教室のリアル」。定時制あるいは小規模校で行われている教育実践とその意味について、さらには高校の再編統廃合についても考えます。

◆10月11日(土) 12時45分から

◆松本勤労者福祉センター  
(オンラインあり)

◆参加費無料どなたでも参加可

教文通信写真館エッセイ (つづき)  
「I will be here for you」

皆さん、カエルは好きですか？

私はやっぱり好きですね。最近、理数探究の研究で生徒と一緒にカエルを取りに行くのですが、取り始めると生徒以上に熱中してしまい、結局自分が最後までやり続ける感じになっています。というわけで最終回である今回は(も?)カエルの話をさせてもらいます。

今回の写真はオキナワイシカワガエルです。

イシカワガエルの仲間にはオキナワイシカワガエルとアマミイシカワガエルがいます。それぞれ沖縄島と奄美大島のみに生息しており、各県の天然記念物に指定されています。

この写真はそんなイシカワガエルが岩の割れ目で鳴いた瞬間をとらえたものです。

写真のイシカワガエルのおどろきや膨らんでいるのがわかるでしょうか。

オスのカエルには、鳴くときに膨らませて空気を溜める袋(鳴のう)を持つ種がありますが、写真のこの膨らみがイシカワガエルの鳴のうです。鳴のうが膨らむのは鳴いたときの一瞬なので、この写真を撮るのには大分苦労しました。

夜、イシカワガエルが息をする沢に入り、カエルを見つけたらカメラを構えて、電気を消して鳴くまでひたすら待った結果がこの写真です。ひたすら待った、というのは一晩だけの話ではなく、数年にわたって繰り返した、という意味です(まあ、コツをおさえてからは毎回のようにこんな写真を撮れるようになりました)。

そんな感じで毎年毎晩のように同じ沢に入っていると、体の模様の様子などから、イシカワガエルの個体の見分けがつくようになりました。

この写真の個体も、毎年同じこの岩の割れ目で鳴いていました。私はそれぞれの個体に会うたびに「お、今日もここにいるな、元気にしてるか?また写真撮らせてもらうぞ」と声をかけていたものです。

研究を離れて早十数年、一度は冷めたカエル熱が最近また復活してきました。それもすべて生徒のおかげです。

一見、毎年毎年同じようなことの繰り返しに思える教員の仕事ですが、生徒は一人として同じことはない。毎年同じ学校にいる自分に、新しい風を持ち込んでくれる生徒という存在はありがたい。そんな風に改めて思った今日この頃です。